広報 しばた 10
平成六年十月一日発行（毎月1日発行）三七三号　発行／黒埼町役場　〒九五〇―一一　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三―一　電話／〇二五―三七七―三一〇一　編集／企画商工課（担当・広報統計係）　印刷／小野塚印刷㈱　経費一部四八円

人 113

"こびき"の職人芸を披露

鳥原　八十一歳
小林　正吾さん

"木挽き"（こびき）という言葉を辞書で引いてみると「木材をのこぎりでひくこと。また、それを職業とする人」と書かれてある。

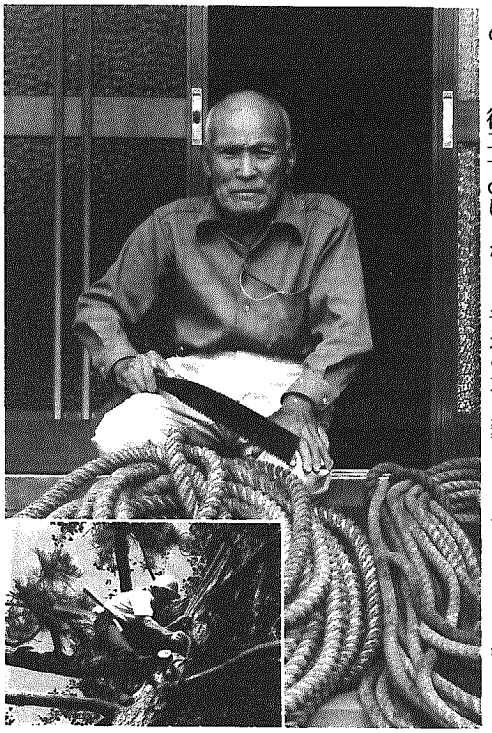
小林正吾さんは町唯一の木挽き職人で、八十一歳というお年ながら、木場八幡宮の松の切り倒しの仕事をされて周囲を驚かせた。

小林さんは、はきもの商の家に生まれた。下駄の材料となる桐の木を買いつけ、現地で伐採し、加工して出荷するのが主な仕事だったが、小学校低学年のころから手伝いをしていた。「木挽きの仕事に就いたのも、小さい頃から木に登り、楽しいと感じたから」で、木に登った時のスリル、緊張感は今もやめられない。

小林さんが、木挽き職人として独立したのは、昭和十三年ごろで、当時は薪や漁船の材料となるケヤキを切っていた。町内や中蒲、白根、新潟などの宅地内にある木を買い、伐採していたが「山の木は、（周囲に障害物がないので）どこに転ばしてもいいので楽だが、宅地の木は家などの建物に向かって倒せないので気を使ったね」仕事の手順としても、まず建物に被害のでないように倒す方向を決める事から始まる。「のこぎりを当てる角度ひとつで倒れる場所が変わってくる。船や家の材料にする木は、枝がついたまま倒すとひび割れて、使い物にならない」ため枝を全部落とすが大木になると"枝"も直径二十㎝にもなり、普通の木と変わらない重さになる。小林さんはそれをロープを使って難なく降ろす。「直径三十㎝ぐらいの木なら一日に五本倒して、加工したもんですよ。大木（周囲二m以上のもの）だと二日から五日ぐらいで切り倒していましたね」それを全て一人でやってしまうのだから、すごい。

そんな小林さんも六十五歳の時に家族の強い勧めもあり、職業としての木挽きを退いた。「危険な仕事だからやめてくれ、と言われてね」しかし、今でも頼まれれば木を切っている。今回の切り倒しは松の木が斜めに大イチョウの木にむかって伸びて、このままではイチョウが枯れてしまうため行われた。枝と枝が絡み合い、難しい仕事だったが、二日間で見事に切り倒した。

小林さんは自分の人生を振り返って「ここまで元気に生きてこられたのは木のおかげ。木には感謝しています。これからは切り倒すのが面倒な木を九十歳まで倒していきたい。もちろん、体がついてくればの話だけどね」と話してくれた。のこぎりを持って七十年になる小林さん、これからもお元気で、我々に"伝統のわざ"を見せてほしい。



写真／上　小林正吾さん。木挽きは現在郡内で3人しかいない。そのうち若い人でも50歳代後半で、後継者もいないため、「この仕事が途絶えるのが寂しい」と話す。下　木場八幡宮での作業風景。「暑かったので、2キロやせた」そうだ。

ほんの一冊

「おじいちゃんは荷車にのって」

ゲードレン・パウゼバンク　作
インゲ・シュタイネケ　絵
遠山明子　訳　徳間書店 1994

ドイツの作家による児童文学。『「もうたくさんじゃよ。」ある朝のこと、おじいちゃんがいいました。「・・・わしを荷車にのせて、山の上へつれていっておくれ。・・・切りたったがけのところまでな。」』という書き出しで始まるこの物語は、生きる事に疲れたおじいちゃんを荷車に乗せて孫のペピートががけの上まで押していくというものです。設定だけだと暗いのですが、おおらかな、人生に対するあたたかさを感じさせる作品になっています。自分を必要とする人や場の存在が生きる希望へと導く事を教えてくれます。小学低学年から。　（中山佳奈恵）

〈人の動き〉

8月末日現在		（前月比）	〔前年同日比〕
人口	24,049	（＋ 22）	〔＋ 62〕
男	11,797	（＋ 16）	〔＋ 42〕
女	12,252	（＋ 6）	〔＋ 20〕
世帯	6,723	（＋ 7）	〔＋ 62〕

8月1日～末日

出生	26	転入	67
婚姻	10	転出	59
死亡	12		

編集室

先日、民具民芸品愛好会副会長の佐藤征次郎さんから「文化祭などに出品・販売する、ひょうたんの出来具合が、今年はすばらしいのです。ぜひ、見に来てください」との連絡があり、鳥原の片岡竹雄さんのお宅におじゃましました。▼行ってみて、びっくり。ビニールハウスの一角に、大小五十個ぐらいのひょうたんが所狭しと成っているではありませんか。大きいものは、長さ六十㎝、重さ十㎏以上もあり、両手で支えないと持てないような重さでした。佐藤さんによると、ひょうたんの形のよしあしは、上のほうから（加工して酒などを入れる場合の注ぎ口を一番目、最初のふくらみを二番目、下のふくらみを三番目とした場合）三対五対七の比率が一番よい形との事で、片岡さんのひょうたんは形、大きさともに申し分のないものが、たくさん成っていました。「穴をあけて、水を入れ、種や実を腐らせて抜きだし、やすりをかけて、それからみがいて、色をつけ、仕上げにまたみがく。手間がかかるけど、今年は作業が楽しみだね」と、片岡さんは語っていました。恵みの秋に感謝といったところですね。

◎さて、来月号では九月定例議会の模様や健康まつり、スポレクフェアーなどをお知らせする予定です。